

いささかの水にうつろふ夕映に
菜洗ふ手もと明るみにけり

島木赤彦

◆現代語訳

わずかにためられた水の水面に映る夕映えの光り
によつて、菜葉を洗う人の手元が明るく輝いていた
なあ。

◆解説

短歌館東の歌碑公園内に、この歌碑があります。島
木赤彦がこの広丘の地に住んでいた時に作られた
歌です。秋になり菜葉を収穫して、冷たい水でひた
むきに洗っている女性の美しい手元が映し出され
ているようです。



この掛け軸を選んだ理由は？

短歌のふるさとの原点でもある人の歌なので、掛け
軸展の最初にふさわしい赤彦のこの掛け軸を選びま
した。入館する前にも、親子で実際に歌碑公園と牛屋
を見学して、赤彦に対する思いを深めてきたところ
でした。「柿の村人」という雅号(ペンネーム)が島
木赤彦の若い時のものだと言われ改めて知り、勉強になり
ました。

掛け軸の扱い方などを体験してみて感じたことは？

掛け軸を巻く紐なんて他愛もないものかと思ってい
ましたが、しっかりと巻けて、しかもほどきやすい巻
き方があることを
知り、また歴史的
な経緯までも知り、
感心しました。



鉢伏の山に朝日さしまろやかに降り
つみし雪はよべふりしとふ 牧水
常念の峯にゐる雲しばしだに晴れよ
とまちて時たちにけり 喜志子

◆現代語訳

鉢伏山に朝日が差し（込んできたぞ。）まるく穏やかに降り積もった雪は、昨晚降ったものだそうだ。常念岳の山頂に掛かっている雲よ、ほんの少しの間だけでも晴れておくれ…と待っていたけど、長い時間が過ぎてしまったなあ。

◆解説

この歌碑は、昭和42年に鉢伏山の山頂に建てられたものです。牧水の歌は大正14年に鉢伏山を、喜志子の歌は昭和28年に常念岳を、それぞれ歌った短歌を喜志子を選び出しました。鉢伏山と遠くそびえる常念岳との情景が美しく浮かびます。夫婦の短歌が時空を超えて一つの歌碑に収められています。



この掛け軸を選んだ理由は？

二首並んだ珍しいものだったこと。また、牧水の短歌が大正、喜志子の短歌が昭和と、時間を越えて一つになっているところにロマンを感じました。私は山が好きなので、特に喜志子の歌う、鉢伏山から眺めた「常念」にも惹かれました。表装のピンク色も素敵でした。来館される皆さんにも感じていただけると良いなと思います。

掛け軸の扱い方などを

体験してみte感じたことは？

掛け軸一つにもこんな作法があるとは、驚きました。掛け軸を掛けたところからゆっくり下ろしていき、字が次第に表れていく時の感激。初めての感覚で、とても新鮮でした。

